

「社会空間論の再検討ー時間的視座から」共同研究プロジェクト

第6回研究会

2008年5月10日（土曜日）午後1時から6時半

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306号室）

報告者：木村周平（京都大学東南アジア研究所）

報告タイトル：過去と未来の間にあること：トルコの地震をめぐる

トルコ共和国イスタンブール市は、近い過去（1999年）に近隣の県で起きた地震と、近い将来に直下で起きるとされる地震の間にある。本発表では、こうした状況下において、「運命論（*kadercilik*）」として大雑把に呼ばれ批判される住民たちの態度、つまり将来の地震に対し思考を停止し、国家や神頼みで何ら自ら対応を取ろうとしていない（とされる）姿勢をひとつの時間観と捉え、それを中心に据えて、1999年の地震から現在までの、地震をめぐる時間のあり方について、三つに区別して検討した。

1つめは、地震の「予期」をめぐる錯綜した態度である。1999年の地震（本発表で主な対象としている地域では、人々は激しい揺れを感じたが直接的な被害はなかった）は、ほとんどの人々にとって予期せぬものであったはずだが、しかし聞き取りの結果、それが起きるとほとんど同時に、そして半ば反射的に、それを予定されたものとして捉え直すようなふるまいも見られたことが明らかになった。そこでは「運命」というものは、予期していなかった出来事を事後的に説明のなかに組み込むひとつの言葉、枠組みとしてとして機能するにとどまらず、身体化され、人々の即座の反応をも枠づけるものでもあった。

加えて、この、予期しなかったものであると同時に予定されたものでもあったという地震の姿は、人々の生活空間そのものに対する「構え」にも影響を与えた。つまり人々は、住居を中心とした生活空間のなかに、先の地震を納得のいくものとし、同時にこれから来る地震の被害のあり方を指し示す兆候を見出そうとしたのである。発表者はこうした兆候探しの態度が、それ以前から人々の変動の激しい都市生活のなかで身につけていた態度でもあるということを示唆した。言い換えるなら、人々は未来から眼をそらしているわけではなく、きわめて錯綜した形で、過去と未来との関係をとっているのである。

2つめは、行政による耐震都市「計画」にかかわる時間である。都市計画は都市の未来像、理想的な未来像を示し、それにむけて現在のあり方を操作するものである。しかしこの計画は単に未来を指し示すだけでなく、現在時点の、定義的にいまだ存在していない地震被害について、過去の災害のデータにもとづき、科学的な手続きを経て算出された被害予想の数値＝事実を根拠に、現実の生活に介入する、つまり現在（現実）化した未来と過去の混合物であった。

3つめは、発表者が「エントロピックな時間」と呼ぶ、地震が遠ざかるなかで現れる時間である。1999年の地震から数年経つと、その分論理的には未来の時間が近づいているにもかかわらず、地震をめぐる活動がかなり停滞していった。発表者はこうしたなかで防災のための住民活動を継続しようとしているグループを紹介し、彼らの活動が未来の地震へ立ち向かおうとするものである一方で、その活動の継続においてはむしろ将来的なビジョンをあえて明確化せず、ただ一步一步進む、問題があれば目の前のひとつひとつに対応する、

という態度をとることで何とか解体を免れていると述べ、それが逆説的に「運命論」と呼ばれる姿勢と類似していることを指摘した。

以上、本発表ではイスタンブルにおける地震をめぐる複数の時間観が論じられたが、いずれにおいても、未来と過去をめぐる錯綜した態度が見られる。それゆえ発表者は、住民の態度をはじめに示したような「運命論」として単純化するのは誤りであり、むしろその姿勢に積極的な価値を見出すべきではないか、と結論づけ、最後に、時間を積み重なる「地層」のようなものとしてではなく、複数の波の混成物（調査者自身の時間その一部であるような）としての「地震」というメタファーで捉えるべきではないか、と示唆した。